69
分枝 branching 21
http://branching.jp
ブランチング 22 発刊 2017 年　9 月 9 日
ブランチング 23 発刊 2017 年　12 月 9 日
ブランチング 24 発刊 2018 年　3 月 9 日
お問い合わせ・入稿先　system@branching.jp

日記 (2017 年 5 月 20 日)

Yoshiaki HIKITA 1994~
疋田義明

紙の上、数色のクレヨンをぐちゃぐちゃと塗り重ねる。そこから指で薄く伸ばしてゆくと、色が混ざり、灰色に近いほの暗い色が広がっていく。うっすらと光を孕んだような半透明な色は艶かしくてどことなく皮膚のようにも見えてくる。
雨上がりの庭で草花のスケッチをしている。花を見て描いては潰してを繰り返していく。花を描いていたつもりが、紙の上にのびた色は人にも見えてくることもある。花か人、どちらでもなくどちらでもあるような何物かになっていた。
家の近所、自転車を転がしている。少し遠くの緑を重ねる山の色を見る。春に潜んでいた夏の兆しがゆっくりといつの間にか表れていたようで色を濃い緑に変えていた。
信号機の柱の足下に身体を精一杯伸ばしているように緑が見える。黄緑、薄い緑の葉、赤紫の茎の伸びる中に点々と小さい五つの黄色い花びらが際立っていた。

疋田義明　Yoshiaki Hikita
1992 年長野市生まれ
画家（無職）
2015 年武蔵野美術大学油絵学科卒業
za486ztch4vc7v7mm6cu@dokomo.ne.jp

トポスパブリック
疋田義明の絵画
@ 医療法人北島眼下クリニック
2017 年 4 月 ~6 月

あいまいな夏の記憶

Mayumi TERASAWA 1984 ~
寺澤真佑美

夏の記憶をたぐりよせながら描く、というのは初めてかもしれない。

正直、夏は昔からあまり好きな季節ではない。苦手なものが多かったからだろうか。プール、夏休み、自由研究、花火の音（しかし、色は好き）、夏祭り。この季節の落ち着かない感じや、ざわつく気持ち。
一番嫌だったのは、周りが楽しくしているなかで楽しめない自分のことだ。

だがそんな中にも、忘れられない感情や見たものが、曖昧でぼんやりとしているけれど、ちゃんと残っている。白昼夢のような記憶もある。
今ではそれらを美しく、愛しく感じている。
こんなことは珍しいし、消えてなくなってしまうかもしれない。
消えてしまわないように、消えないうちに。

そんなことを思いながら描いている。

寺澤真佑美 Mayumi Terasawa
1984 年生まれ
アーティスト
日々の生活のなかでマイペースに制作している。

2017 年 6 月「NAF（nagano art file）ナガノアートファイル 2017 - Art Show+art free market - 」FLATFILESLASH（長野市）
2017 年 7 月 4 日～ 7 月 23 日 個展　蕎麦料理処「萱」併設アートギャラリー Blanc（千曲市 戸倉）
2017 年 7 月 7 日～ 7 月 11 日「ちいさなアート展 2017 Nagano」ギャラリー松真館（長野市 松代町）
2017 年 10 月 26 日～ 29、11 月 4 日～ 11 月 5 日「ちいさなアート展 2017NewYork」
Studio 34 Gallery（アメリカ　ニューヨーク）

わたしの退屈

Yu OYA 1989~
大谷祐

明るい日
わたしはひとり
家で待つ

それから
窓を開けて
昨日までの
あれこれを追い出す

圧倒的な
日差しを
浴びないように

待つことは
苦痛ではない
待たれることのほうが
わたしは苦しかったりする

退屈な
日常を
いつくしむように

なにかを
追いかけようとするのは
危ういから

気がついたら
庭のシャクナゲが咲いていた

気がついたら
おなかがへった

それくらいが
ちょうどよかったりする

大谷祐 Yu Oya
1989 年群馬県生まれ
詩人
http://oya-u.com

夢日記

Masayuki TTOKUNAGA 1960~
徳永雅之

「眼医者」2016 年 8 月 12 日

目医者がいきなり僕の眼の眼圧を測りだした。「7，9,,,、やっぱり高い！」そしてとても急ぐように、僕に目を上を向いているようにと、命令口調で言った。「行くぞ、、3，2，1,,、」眼球の下の方から深く注射を打たれた。もう片方もだ。「3，2，1,」と言いながらも、こっちの方の目にはなかなか打たない。でも結局はぶすりと打たれてしまった。

「黒く長い犬」2016 年 11 月 3 日

道を歩いていたら黒い蛇のように長い犬を散歩している女性がいた。黒い毛の生えた蛇といった方がいいが、これは「犬」なのだ。リードでつながっている顔を恐る恐る見ていたら、フラミンゴのような顔だった。しゃがんで写真を何枚か撮らせてもらった。飼い主の、サングラスをかけた白人女性と少し話をして、彼女の家でお茶をいただくことになった。犬の名前はホライズンと言うそうだ。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

「吉井和哉の大ファンの男の子」 2016 年 11 月 16 日

何処からか流れてくる、吉井和哉の曲に合わせて、嬉々として歌う小学生の男の子。歌詞も完璧に覚えてそうだ。僕はその横で、疲れてるがちょっと良い感じで、遠い目をしたその子のお母さんの胸元を見る。

「ガラスの箱」2017 年 3 月 10 日

黄金町は坂が多く、古い温泉街のような佇まいだ。財布も持たず、ぶらりと散歩。古い学校の施設のような建物に入ると、友人がそこにいて、僕に何かを教えてくれた。「生憎財布を持ってない」と言うと「男が財布も持たずに出歩くなんて」と、100 年も前の男のような口ぶりで僕を諫めるのだった。近くで開催している、別の友人の個展を観に行くことにした。歓楽街を通ってゆく。やはり古い木造の教室のようなところが会場で、その中には大きなガラスで出来た箱状の物体が置かれている。友人はもうこの世の人ではなく、そのガラスの箱は、あの世とこの世を結んでコミュニケーションが出来る装置なのだそうだ。友人はガラスの中にぼんやりと現れ、何か挨拶のようなことをしてくれた。少し距離を置いて見ている我々をよそに、自ら箱の中に入って行き、彼と最もコミュニケーションをとったのは、うちの猫だった。猫は「にゃ〜」と鳴いて、懐かしそうにガラスの中の友人に近づいていく。お互いに手と前足を伸ばし、触れ合おうとしている彼らを見て泣きそうになる。

「おみくじ」2016 年 12 月 18 日

小学校高学年くらいの娘を連れた、ずいぶん前に付き合っていた女性と会った。彼女の娘とは初対面だったが，すぐに親しくなれた。
三人で妙な露天でおみくじを引いた。それはおみくじと言っていいものかどうかわからないようなもので、様々な筆跡と大きさの手書きのメモのような紙が、蓋もしていない箱に入っている。それらは皆、変色し、くしゃくしゃになっていた。僕が引いたものは、どうやら「凶」のようなものらしい。色々書いてあるのだが，内容が支離滅裂で、何が書いてあるのかわからない。ところどころ濡れて文字が滲んだり，シミがあったりして、とてもキタナい。

「松浦亜弥のステージ」 2006 年 1 月

彼女が歌っているすぐ横で僕は椅子に座っている。1m も離れていないので、彼女のヘソを出しているお腹の辺りばかりが視界に入る。

「パフォーマンス」2016 年 2 月 16 日

友人が経営している造形スタジオはガラス張りの現代的なものになっていた。その入り口を破壊するパフォーマンスがあり、社員達がその前に集っている天井まであるガラスが割れる瞬間は圧巻だった。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

徳永雅之 Masayuki Tokunaga
1960 年　長崎県佐世保市生まれ　埼玉県桶川市在住
画家
http://www.tokunagamasayuki.com/

ナガノオルタナティブ 2017 - プリベンション -
徳永雅之展
2017 年 7 月 1 日~7 月 29 日
FLATFILESLASH Warehouse Gallery

トポスパブリック
徳永雅之 光の絵画
2017 年 7 月～9 月
@ 医療法人北島眼科クリニック

トポス高地 2017
徳永雅之展
2017 年 9 月
@ アリコ・ルージュ

マリア

Yui MIFUNE 1972~
三船ゆい

「あるがままに」
優しい眼差しが、その息を引き取るとき

まるで、マリアの為に存在していたかのような
貴方の将来を案じて

なおも
「貴方の為に生きろ」
と、言い残したのか

物語にはいつも空白がある

言の葉は返って貴方を彼女に繋ぎ止めた
彼女を守るように
彼女にまといつく炎のように
決して離れない

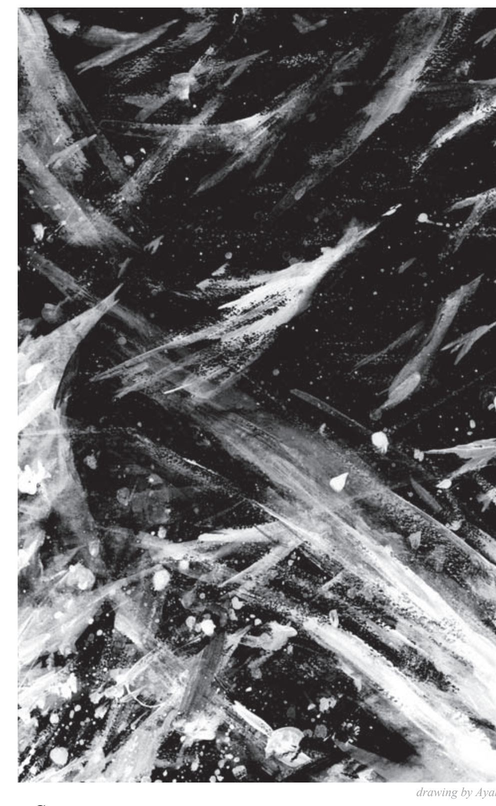
彼女がいるから貴方があり
貴方がいることが、彼女が生きていた証

ただ一つの光

散り散りに破っては、
繋ぎ合わせたリアルを残して

その扉を閉じる

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県山ノ内町在住　自営業



drawing by Ayaka Nakamura

fly

Ayaka NAKAMURA 1988~
中村綾花

誰かがそう言ったから、僕はふり向いた。

風が吹いた。　緑が見える
君が過ぎてく　大地を見つめる
誰かが手を振る
聞こえてくるような
分からないような
とおく　とおくから
言いたいことは何か
叫びたいことはあるのか
どこからどこへ流れていくのか
向かっていくのか
聞こえているのか　届いているのか
手をのばせるだろうか
走れるだろうか
泣いているのか
さぁ　さぁ　さぁ　さぁ
さぁ　さぁ　さぁ　さぁ
きっと
きっと、

中村綾花　ayaka nakamura
1988 年東京都生まれ。
2013 年、武蔵野美術大学油絵学科版画専攻卒業。
手描きをメインに、繊細かつ力強い画面づくりを目指し、
ミュージックビデオやテレビ番組のアニメーション、装丁のイラストなどを手がける。
映像作家 100 人 2015(BNN 出版) に掲載。木版画家・ペインターとしても国内外で活動している。
六本木アートナイト 2016 では横 7m の巨大ライブペイントを行う。
http://ayakanakamura.com

壷の雫

Masato YAMAMOTO 1976 ~
山本正人

初対面の人と巡り会い、身近になるほど必ず思い出す『壷の雫』。

出会い、語り、ごく親密になる人は
既に何千年も前から知った存在で、
何度も生まれ変わりながら
時には夫婦であり、時には兄弟であり、
叔父であり、祖母であり、娘であり、
何かしらの出会いを幾重にも繰り返しているという。

人類７０億人と数えきれない人の中で生きながら
影響し合う存在はいつも同じ魂なのだと。

その魂の繋がりは同じ一つの壷の中にあり、
私はただ一滴の雫なのだと言う。

あーそうか、
だからこんなに惹かれるのか。

そう思うと
妙に納得する。

妻は実母が亡くなった後に生まれた１人目の娘に
幾度となく母の面影を垣間見ると言うし、
私の親父が他界してから生まれた息子は親父にそっくりで、
未だ一歳児ながら
ふとした時に、飲んだくれていたあの人がいるかのように。

では、である。

では、私があの女性に否応なく惹かれるのも、
やはり同じ壷の雫だからなのか。

理性や道徳という概念こそが
実は間違っているのではないかと錯覚するほど、
私を揺さぶる何か。

惹かれれば惹かれるほど、
今ある居場所が脆くも崩れるだろう事は、容易に予想がつく。

そちらに行くのならば・・。

そんな事を思いながら、
不要になった細切れの建材を焼却炉へと放り込んでいた。

今日も茹だるような暑さで
ただでさえ陽炎が見えるくらいなのに、
火の世話をするのはちょいと酷だなと
いくぶん愚痴をこぼしながら
流れる額の汗を拭い、
ふと、立ちのぼる煙を追って空を見上げた。

すると炎の上方に、
激しく巻き上がる熱気から逃げるように
１匹の蜘蛛が糸を伸ばしながら漂う姿が見えた。

焼却炉があるこの型枠の加工場は壁がなく、
高さ３メートルほどの屋根だけが広く張り出している。
焼却炉は加工場の端にあり、
雨雪が何とか凌げるかという場所にあった。

月に一度も稼働しない焼却炉だけに
どうやら蜘蛛は上の軒先に巣を作り、根城としていたようだ。

銀杏ほどの立派な蜘蛛だが、
炎のあまりの熱さに必死だということは
人間の私にも見て取れる。

（助けてやらなきゃ・・）

柄の長い端材を手に取ろうとしたが、
なぜかその蜘蛛が自ら逃げ切る姿を拝みたくなり、動きを止めた。

幸いにも蜘蛛は炎の真上から逸れていたものだから、
垂らした糸をそのまま伸ばせば熱気から逃れられるはずだった。

ところが蜘蛛は、
命綱を伸ばすのではなく
さらに別の糸を長く長く吐き出し始めた。
吐き出した糸は風に乗って流れ、陽の光を受けて虹色に揺らめいた。

（なるほど、そうやって遠くの何かに糸を伸ばそうというのか。）

自然の神秘とも言うべき情景に
私も仕事を忘れて思わず
「おぉ！」と感嘆の声を漏らした。

とはいえ何事も思い通りにいかないのが世の常と言うべきか、
神の見放したが如くに風は弱まり、
無念にもその虹の糸は、下へと枝垂れ落ちてしまった。

（蜘蛛よ、どうする）

いつの間にか私は心の中で頑張れと願っていた。

すると蜘蛛は、
命綱を手繰り寄せながら
元来た根城へと戻り始めたのだった。

（おい！そっちは熱風だから駄目だ）

万事、策が尽きたのか、
それともじわじわと押し迫る苦痛に観念したのか、
それまで蜘蛛にはずっと居心地が良かったであろう場所へと向かうのだ。

その時、
「お〜いっ、ちょい手伝ってくれっ！！」
と同僚が呼ぶ声に、はっと現実に引き戻された。

「はいよっ！今行くわ！」

もちろん蜘蛛の行く末が気がかりで仕方なかったが、
これまた割りと切迫した同僚の声に、やむなくその場を離れたのだった。

ーーーーー

ほどなくして焼却炉へと戻って来た私は、
あの蜘蛛はどこへ行ったのかと、辺りを隈無く見回した。

そして軒先の根城の方に目をやると、
命綱に垂れ下がっては居たものの、
先ほどの蜘蛛が手足をきゅっと縮こめて
熱風に煽られ無機質な振り子のように揺れていた。

もしかしてまだ生きているのかもしれないとじっと凝視し続けるが、
数分経っても動く様子は全く無い。

どうやらもう、既に息絶えているようだった。

（そっちへ行っちゃ駄目だろ・・）

それはまるで、
私が不徳な未来を選択したとしたら、
その行く末を暗示するかのようであった。

山本正人 Masato Yamamoto 1976~
群馬大学教育学部卒　長野市在住
IT

ご馳走

Shigemichi BINNAKA 1941~
備仲臣道

画家の貘先生は、ほら吹きとして知られている。貘は号であって、本名は佐藤義清というのであるが、先生はもっぱら絵を描くばかりで、歌はお詠みにならない。貘と号したのは「夢を食って生きる」ということのようであるが、実は貘が食うのは、夢は夢でも悪夢だということをうっかりしていたようで、どうもその辺りに先生の深い苦悩の因があるらしく、いつも眉間に皺が刻まれていた。
ある夜、貘先生が私にご馳走して下さるというので、友人と二人で出かけていった。そのご馳走というのが、先生の酔余の話に何度も聞かされていた、蚊の目玉のスープである。先生のお宅は旧家で昔々の豪農であって、油屋を兼ねていた。私たちが高校生のころには、先生の家の裏庭を隔てた奥に大きな蔵がたくさん並んでいたのを記憶している。むろん、母屋はいまも豪壮なつくりで、森のような木々を背にしている。門から御影石の敷かれた上を歩くと、手の込んだ細工のガラス戸が見えるのが玄関で、那智黒の小石を敷き詰めた床を踏んで、分厚い欅の式台を上がると、奥の座敷に明るく灯がともって、くつろいだ格好の貘先生が座っていた。
まずは一献ということでお酒を飲みはじめたが、先生は皿数が多いのがお好きということで、お膳の脚が曲がるほどにあれこれと並んでいる。とは言っても、見たところはいつもと同じで、ほうれん草の胡麻よごしや、トマトのざく切りという常連の顔ばかりであったが、少しお酒が入って先生がご機嫌になったころ、奥さんがお皿を運んできて、どうやらそれが蚊の目玉のスープであるらしかった。
「順序もなにもないけれどね」と貘先生が、いたずらっ子のような目をして言った。「これが、ご案内の蚊の目玉のスープさ。諸君は学問がないから知らないだろうが、もともとは中国の四川料理だから、干ししいたけとか、炒り子と言って、なまこを乾燥させたやつだね、そういうもので出汁をとってある。言ってみればなんの変哲もないスープだけれど、ぱらぱらっと浮かせてあるのが蚊の目玉だよ」
見たところは小さくて良く判らないけれど、なにか浮いている、これが蚊の目玉なのであろう。口に入れてもぷちぷちとつぶれるだけで、香りもなければ、おっしゃる通りでなんの変哲もない。スープは確かに中華という気がする味である。
蝙蝠は夜になると、群れをなして洞穴から外へ出る。一本の綱がよじれたようになったり、大きな布をひるがえした形で飛んだりしても、暴走族じゃあるまいし、無駄に競走しているのではない。精一杯開いた口に蚊を吸い込んでいるのだ――と貘先生は言う。
暗い空を飛んで虫を捕らえる、しかも帰ってゆく洞穴というのが日中でも暗い。だから、蝙蝠は光のない場所でも目が見える、それは蚊を食っているからだ、蚊を食えば暗くなると目が不自由になる夜盲症をはじめ、目の病気に効果があるに違いない、という展開になったのだと言われている。だから、中国では古くから、蚊の目玉のことを「夜明砂」と言っているそうで、いまで言う薬膳料理が、蚊の目玉のスープなのであろう。
「しかし、それは違うな」と貘先生は、つまらなそうな顔で言った。私たちを斜に見て、ふんっと鼻の先で笑っている。「それだけのことで、こんな面倒なことをしてまで、蚊の目玉を食わんだろう。なんだと思うね」
「さあ」
「決まってるじゃないか。そりゃあうまいからだよ。そうでなくて、誰がこんなものを食うかね」
その、こんなものを、いま私たちはご馳走になっているのであるが、貘先生のご高説は、人を黙らせておいて続く。かたわらで、さっきお皿を運んできた奥さんがにやにやしている。眼鏡の奥の細い目がなおさら細い。
つまり、料理に凝るのは金持ちである。この世のありとあるうまいものを食い尽くして、まだほかにうまいものはないかと、いつも涎を垂らしているのは彼らで、しかも高等遊民とかいう暇人と相場が決まっている。暇人は本を読むから、なまじっか知識があって、だから、蝙蝠の生態なども知っていたりで、蚊の目玉に逢着したのである。
「そうだろう。そうは思わんかね」
貘先生は目を鋭くして同意を求めた。
蝙蝠は深くて暗い洞穴に棲んで、岩肌の天井からぶら下がっているから、下の床は糞だらけで、どろどろとぬかっている。この糞を小まめに集めて洗うのである。
「笊のような目の粗いものじゃだめだな。蚊の目玉は粒が小さいから、笊の目に詰まってしまう。内田百閒という偏屈な食通の作家がいてね、彼がシャンパンのおかずに、おからを合わせるという文を書いている」
「おからですか、あの豆腐を作ったときに出る」
「そう、おからを買ってきたら、まず袋に入れて水の中でごしごし洗うんだとさ。だから、蚊の目玉の入った糞も目のつんだ布の袋に入れて、川の流れなんかで、ごしごしと洗うんだと思う。そうすると糞は流れて、あとに目玉だけが残る。蝙蝠が食っても消化しないのは、目玉はチキン質とかいう物質だからだそうで、だとすると人間が食っても、ねえ、同じことだろう」そう言いかけて、貘先生は大口開けて笑った。「それを食いながら想像するというのは、あまり愉快なものではないね」
そのとおり、私たちの前には、蝙蝠の糞から獲ったやつが、それぞれ並んでいるのである。
どうやら、食通と言われる人種は、偏屈なもので面倒なことをすると、言いかけてやめた。蝙蝠の糞を集めるのも洗うのも、それを食う本人ではない。使用人か人夫か、それ専門の食材調達業者がいるかするのであろう。百閒のおからにしても、袋に入れて洗い、さらに炒りつけるのは百閒ではない、「家の者」つまり奥さんかお手伝いの女性か、貘先生にしてもスープを作るのは奥さんで、先生はパイプでカプスタンかなにかを吹かしながら、あれこれ口うるさいことを言っても、手は出さないに決まっているのである。
「ところで、小泉武夫という人が『奇食珍食』という本に書いているけれど、蚊の目玉のスープというのは、中国でも食堂の看板に出てはいるけれど、実は嘘なんだってね」
「え、嘘ですか」
私は思わず手許のお皿に目を落とした。さっき、うっかり感心して見せなくって良かったと思った。これだから貘先生は油断がならない。
「目玉は確かに目玉なんだけれど、アミという蝦の小さいようなのがあるね、あの目玉なんだそうだよ」
そう言われてみると、スープのどこかにアミのような味が、と思いかけたところで、貘先生が言葉をつないだ。
「でもね、今夜、諸君に差し上げたのは、これは本物だよ、本物」
わざわざ二度まで言うところが、なんともくさいという気がする。どうも、手の込んだほらであるらしい。
「いやね、さる人から本物を手に入れたんだよ。信用の置ける人さ。だから本物だよ。私ともあろう者が、君たちに贋物をつかませるかね。第一、私は自分の舌を信じているよ。確かに本物」
「先生は前に蚊の目玉のスープを召し上がったことがおありなんですか」
「私は中国にいったことはあるよ。あるけれど、それは北のほうの砂漠でね、四川省のことなんて知らないねえ。大体において、君たちは学問がないものだから、そうやってすぐに人を疑うけれど、いけない癖だね」
言いながら先生は、奥さんになにやら言いつけた。奥さんがすぐに持ってきたのは、小皿に乗せた大粒の黒い葡萄のようで、しかし、二つしかない。それを私と友人の前に置いて、貘先生は言った。
「これはソーセージのようなものだよ。アマゾンの現地人が食っていると、さっき言った小泉さんの本で読んだから、一度食って見たいと思っていたんだが、最近知り合った探険家にそう言って、やっと手に入れたんだ。あとは食っちまって二つしかないので、今夜のために取っておいたのさ」
貘先生の、小泉武夫の本からの請け売りによると、これは蛭の牛血ソーセージだという。アマゾンの現地人が山に入って山蛭を捕まえ、持ち帰って牛の体にくっつけておくと、夜の間に牛から血を吸った山蛭は、球のように丸くふくらみ、ふくらみ切って地面に落ちる。それをゆでると血が固まって、いま目の前にある黒い球になる。アマゾンの奥地から、どうやって日本まで持ってきたのか、そんなことは貘先生は言わない。多分知らないのだろう。
「山蛭ですか。そう言われてみると気持ちが悪いけれど、しかし、どう見てもこれは葡萄の巨峰に見えますがね」
友人と二人して手を出しかねていたら、貘先生が言った。
「君たちは疑り深いね。どこが巨峰なものか」
「いや、巨峰じゃなくてピオーネかもしれませんね」
そのとき、貘先生の目が微妙に動いたのを、私は見逃さなかったつもりである。そうして、友人が黒い球体を箸でつついていたら、そいつが転がった拍子に小さな穴が見えた。房になっている葡萄の実が、茎につながっていた穴に違いない。
「や、君は余計なことをする」と貘先生があわてて言った。「そんなことをしないで素直に食えばいいものを」
「やっぱり葡萄じゃないですか。そうか、巨峰じゃなくてピオーネなんだ」
そう言って友人とうなづきあっていると、貘先生は決まり悪そうにちろっと舌を出し、首をすくめてひっひっと笑った。
「ああいや、これはまいったな。こう簡単に判ってしまうとはね。君たちがどれくらいものを知っているか、ちょっと試したんだ」
貘先生は奥さんを振り返って、小皿を持っていかせた。あとで房になっているやつをデザートに出すように言いつけている。
「それでさ」と貘先生は唐突に話し出した。「君たちは知らないだろうが、江戸時代の『豆腐百珍』という本に、いろんな豆腐料理が紹介されている」
そのなかに「うつし豆腐」というのがあって、鯛の大きめの切り身と、これも大きめの四角に切った豆腐を鍋に入れて煮る。取り出した鯛は捨てて、豆腐だけを生姜醤油とすりおろした柚子で食うのだという。
「なんということをするのかね。鯛の香りを豆腐に移して、その味を楽しむというのは判らないでもないけれど、私なら鯛ごと食うね。鯛を捨てることのどこが粋なのか知らないけれど、こういう気取りはいただけない。粋だの通だのというのは窮屈なもんだね」
貘先生は首を振りながら、口をへの字にして見せた。
「江原恵という料理人が『庖丁文化論』という著書の中でですね」と友人が言った。「そういうスノビズム、俗物根性が、江戸時代に幅を効かしていたところに、強いて言えば日本料理を衰退させた主因があると書いています」
「人を馬鹿にしていますよ。もっと素直に物が食えないのかしら。蕎麦通の男が臨終の床で、一度でいいから汁をたっぷりつけて、蕎麦を食ってみたかったと言った、あれですよ。下らない」
「そこがそれ、金があって暇人で、なまじ教養もある人種の度し難いところさ」
「石川淳に『おとしばなし　堯舜』という小説がありますが、豆腐料理屋をはじめる話が出てきます」
「ほう、どんな料理を食わせるのかね」
「それが、何十種類もの料理を上げて、結局は冷奴と湯豆腐の二種に落ち着くのですね。水に浮かべたのと湯に泳がしたのと、つまり、素の豆腐の味を至上のものとする、というのでしょう。そういう素直なところが一番うまいのじゃないですか」
「なるほど、君たちはなかなかの学者だね」
「暇人ですから、本は読んでいます」
「考古学者の森浩一先生がですね」と、友人がまた言った。彼は学者ではないが、考古学に詳しいようである。「九州の漁港へ発掘にいったとき、町にちゃんとした食堂がなくて、五人も入ればいっぱいの飯屋に入った。メニューもないから、二人いた先客が食っていたものを見て、なにか判らないけれど同じものをと言って頼んだというんです。これが鰹の腹皮というもので、飛び切りうまかったと『竹べらとペン』という本に書いています。森先生は外国へいったときなども、周りの人の食っているものをカンニングして注文するそうですが、知らないということに素直になれば、うまいものと自然に出会うのじゃないですかね」
「君たちもさっき、知らないということに素直になって、蛭のソーセージを食えばよかったじゃないか」
「それは先生。まあいいですけれど」
やがて奥さんがデザートの葡萄を持ってきて、同時にお茶が運ばれた。貘先生がなにか言いたそうな顔をしている。自分の番まで待てない子どものようである。
「いけっ茶、また来いっ茶というのもあるがね、これは、そんじょそこらのお茶じゃない。学問のない人は、お茶と言えば緑茶、紅茶くらいしか知らないだろうが」
「ウーロン茶も知ってます」
ウーロン茶と言われて、貘先生がぎくっとしたように見えた。
「中国人はウーロン茶は暖かいのしか飲みませんね。日本人のように冷たいのは飲まないようですが、なぜなんでしょう」
「さあ知らないね。私は中国人じゃないから。それよりも君、人の話の腰を折っちゃいけない。小さいころお母さんに教わらなかったの。まあいい。とにかく、世の中で一番うまいお茶はね、これを猿茶という」
「えんちゃ」
「そう、猿の茶と書くね。中国も四川省は高い山や深い谷が多いから、めったに日が当たらない。たまにお天道様が顔を出すというと、びっくりして犬が吠えるというくらいのものだ」
ある山の高い崖の上に茶の木があって、霧のかかる具合が絶妙だから、その木から採ったお茶がうまい。とは言っても人間業では登っていけないような急坂である。どうして味が判ったかはともかく、猿を訓練して、その葉を摘ませたのだという。
「それが、いまそこへ出したお茶だよ。お口に合わないかもしれないけれど、それで口をさっぱりさせて、狐の化けたような女に捕まらないようにお帰り」
「いまどき、この辺に狐が出ますか」
「馬鹿だね君は。狐の化けたような女と言っただろう。それだったら、その辺にたくさんいるさ」
「まあ、いいことにしますけれど、このお茶ウーロン茶じゃありませんか」
貘先生は飛び上がるような顔をしたが、ぎょろ目を剥いて言った。
「猿茶と言っただろう。どうも君たちは素直でないね。どこかで悪い酒でも飲んできたのかね」
「はい、夕方からずっと、こちらでいただいています」

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941~
韓国忠清南道大田生まれ 著述業
甲府第一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書 『蘇る朝鮮文化』（明石書店）『高句麗残照』（批評社）『司馬遼太郎と朝鮮』（批評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会批評社）『内田百閒文学散歩』（皓星社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagune@yahoo.co.jp

『艶本ラプソディー』皓星社・刊、１４００円＋税。2016 年 6 月 29 日発売。
江戸軟文学に魅せられ、艶本を刊行して 50 年、
坂本篤の発売禁止、罰金、逃亡、入獄に彩られた 70 余年の生涯を描く初の評伝。
＊書店にない場合は出版社にお申し付けください。
皓星社　東京都千代田区神田神保町３－１０　03-6272－9330

新鮮保存食

Ami IMAI 1990~
今井あみ

一回でもハグすればよかった
体育祭ともなれば半袖半ズボンで肌と肌が触れ合う
肉体を生で見る
タオルを首に巻いている

こういう事が起きたとき、こういう反応をするんだ
これから起こりうる事に対して、こういう準備をするんだ
同じ空間で起きた出来事への反応を共有することできる
共感ではないにしても、その人を味わうことができる

１日、１ヶ月のバイオリズム、テンションの変化
この人は最大に怒ってもこのくらいで、怒っている時にはたくさん言葉を発するわけではなく、
言葉少なに本当の気持ちを言う
次の日には何事もなかったかのようにする

朝はいつも元気がない
夕方にはスーッと消えるように居なくなる

同じ空間にいたから魅力的に思うこともある

抜けた毛は、たまにもう一度皮膚に戻ろうとする
へんなところに戻った毛を見つけて、妙な気持ちになる

宝箱にしまっているものをときどき引っ張りだして、味わってはまたしまう
鮮度が落ちないようにと大事に保存していたけれど、
鮮度が落ちたらいいのにとほったらかしているのに、今もまだ美味しい

サラッと速乾
瞬時にとまではいかなくても、気がついたら乾いていたい

今井あみ Ami Imai
1990 年うまれ
長野市出身
表現するひと
略歴（概略）表現することをつづけている。
絵画、文章、焼き物など、表現方法を模索している。

imaiami1990@gmail.com
imaiami.net

今井あみ展
2017.7/7~7/16
入場無料
ギャルリカネマツ
〒380-0831 長野市長野東町 207-1KANEMATSU

photo by Nami Goto

TIMELAPSE

Nami GOTO 1969~
ごとうなみ

円錐のコーヒーフィルターを切らしていた。出かけついでに買おうと思っているのに出かけている間は一向に思い出さず、朝コーヒーを入れようとする時にいつも「ああ、そうだ」と思い出すのだから、ようやく諦めて近くのコンビニへ行き、代用のフィルターを購入し、十数年来愛用している陶芸家阿久津真希のワイヤーワークにフィルターをセットする。朝、コーヒーを淹れることはほぼ無意識の所作であるから、それに抗わぬよう、つまりフィルターの耳の部分をひっくり返して二度折る動作が寝ぼけていても行えるよう、セットする向きは意外と重要なんだなと、手まどう日々を過ごしてようやく今朝クルッとひっくり返した。いつものようにコーヒーを淹れ、そのまま今日は何気なく「北のカナリアたち」という映画を観た。それはひどく不幸が連鎖する内容で見終えた時にはやるせない気持ちになった。人間性の善悪に関係なく、負は負から生まれる。そういう提示の映画だった。苦しい境遇に生まれた主人公は、自分の親への愛情を握りしめて自分を我慢する。普通なら幼い子どもが当たり前のように発する自分勝手な感情や行動も心にぎゅっと蓋をして、優しさと責任感ゆえに自分をとことん抑圧する。けれどいつしか善意な抑圧の日々が圧迫によって怒りへと変わり、その怒りは自分へと向かい、まるで自分はこうあるしかないのだという錯覚にすり替わり、大人になる少年の心を不安や罪悪で浸透させていく。彼にとっては愛である行為が、現実をジリジリと歪めていく。誰が見ても理不尽な状況にも彼は愛で臨んでいるのに、なぜかうまくいかない。いつもやるせない。自分を慰めてもどこか埋まらない。何かがおかしい。何が彼の現実をそうさせていったのか。腑に落ちない結果となって結ばれた映画のラストに、私は自分の現実をだぶらせたのだろうか。この後味の悪さは、耳の中奥に見えている耳垢を見ながら一呼吸おいて挑みにかかるような、もう少しで手に入りそうな予感じみた気配で私から離れなかった。

誰しも赤子は一糸まとわぬ姿で、圧倒的に弱い姿で生まれてくる。小さな新しい生命は自らの命を守ってもらうことと引き換えに、生まれ落ちた血縁の慣習を受け入れる。親を真っ向から愛し信頼することが自明の理と、赤子の魂は自覚している。持って生まれた叡智と、親の愛を得ることつまり自分の生命の維持を確保することが赤子そのものなのだ。しかし誰もが生まれ際に持参したこの叡智は、知覚や感情が急速に発達する幼児期から児童期にかけて、家庭や社会に適応するための日々の学習に紛れ、親や養育者から伝えられる言葉や躾、また置かれた環境によって起こる様々な出来事や体験にまみれ、だんだんに記憶の底へ埋もれていく。生まれてから児童期を跨ぐ十数年間に一番多く使われた脳内の情報伝達経路が、その後その人間の主要な思考経路となるという説も心理学の分野であり、謂わばこの十数年間の感情を伴う体験から得た思考癖で、その後の人生が連鎖していくわけだ。その思考癖が本人にとってい い作用を及ぼすなら何ら問題はないけれど、もしそれで何かうまく回らないのなら、この思考癖を一旦手のひらに取り出して、過去に巻き戻したり多角的に見つめ直したりして、現在を解体することもできる。

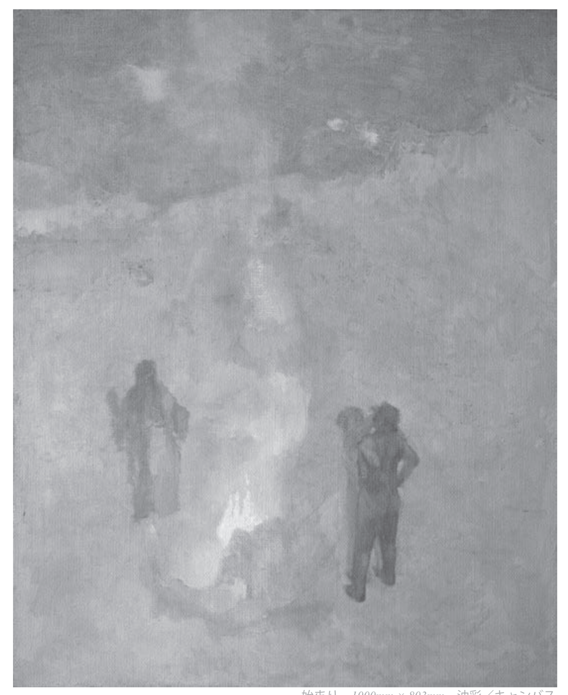
負はおよそ次のように定義されている。「担う。負い目を持つ。被る。負ける。背く。0 より低い数」。心理学では「不安、恐れ、焦り、拗ね、泣き言、心配」などの言葉がその概念に当てられている。私がこれら負の定義を理解したとき、心はショックを受けた。母が私に躾けてきた言葉がけは心配という根を持っていたことを子ども心に分かっていたけれど、それは母が背負う負から派生しているなどと思ってもみなかったし、毎夜枕を濡らした私の寝入りは、望んでもいないのに私の潜在意識に永久に続く悲しみを刷り込んでいたのだ。小さい私は、いずれ太陽が昇るように大人になれば自然と私の暗闇も明けていくんだと思っていたけれど、悲しみの羊水に培養された私の思考癖は、ずっと夜明けを待ち望む私のまま、現実を変えない。思考と心と現実はいつも巧みに関連しながらループして、意識では望む理想の世界から、何故かなぜか私を遠ざける。私がこれを諦めて受け入れれば多分このまま人生は終わるだろう。それを一生と呼ぶならそれでいい。けれど私は、私の知らないもう片方の世界も生きたい。だから私は心眼でこの連鎖と因果の解体に手を伸ばし、世界の反転を求めてきた。

宇宙はきっといたってシンプルだ。私が今朝コーヒーフィルターをくるっとひっくり返したように。物事の流れを把握して、抗わないようにすればいい。私たちが生まれながらに持参していつの間にか埋もれてしまった叡智を掘り起こして味方につければ、過去からの思考癖を意識して変えられる。負は負から生まれるのだから正は正から、楽は楽から、喜は喜から怒は怒から。今まではというこだわりや、これからはという照れなど捨てて、私の足先ごとクルッと望む方へ向き直って終えばいい。そこからもう一つの世界が始まるのだから。そんなことを、映画を見終えた午後に、作りかけのブランケットを編みながら考えていた。私の膝の上には、時折耳をピクンと震わせながら丸くなって眠る猫がいる。

そういえば昨日、苦手な人と話さなければならない仕事が決まり胸がざわついた。ざわつきの正体は自分の劣等感だったけれど、咄嗟の感情の処理が縺れてそのまま放置した。すると次々ととりとめの無い思考が雪でも降るかにしばらく私の頭の中を占領して、放置した劣等感は蒸発も溶解もせず私の心の中の蟻地獄にゆっくりと落ちたまま、時と共に黙り込んだ。砂のような無数の思考に紛れてしまったこの感情を拾い損ねて、時間が経った。あてもなく埋もれワタシに気づいてもらえないことにしびれを切らしたこの感情は、私の無意識を操作して、このいたたまれなさを発散しようと脳へ行動を指示し始める。私は自分の思考癖を観察をするようになって以来、自分のネガティブな感情がどんな経過をたどってどんな行動へ変化するのか、そのサイクルを少しだけ自覚できるようになった。私の場合これら発散の多くは、夕時の焦燥感と重なり、不安はだいたい過剰な食へと化けていく。食べることで気を紛らわそうとする。昨日の胸のざわつきもこれらの経緯を辿ってジャンクフードを誘って食卓へ現れた。が、私はこれを許してみた。「好きなだけ思う存分食べてやろう」労うように言葉を浮かべて、その通りにした。すると今朝たんまりと便が出た。その単純さにびっくりして思わず両手を合わせて笑ってしまった。初めての爽快感だった。まるで単純な、トンネルのようなこの身体。今まで気持ち良く感情も出すことができなかったのは、暴食を許せない自分の罪悪感も一緒に食べてしまったせいかもしれない。そう思うと途端に気持ちが楽になって、そうだ、毒には毒を盛って糞にして流せばいいと、ひとつ循環をつくれたことを素直に喜んだ。こうして一つ一つ新しい循環を明るくつくっていく。昨日依頼された仕事も、苦手意識を忘れるくらい準備万端にして挑もうと、前向きに思い直しながら私は今朝コーヒーを淹れていた。

ごとうなみ Nami Goto
1969 生まれ　美術家　長野市在住
namigoto.com
gg ごとう画室主宰
gotogashitsu.com

「Nagano Art File アートとマーケット」2017 年 6 月 10 日～ 6 月 24 日
@FLAT FILE SLASH LOUNGE GALLERY(長野県長野市)
「ちいさなアート展 2017Nagano」2017 年 7 月 7 ～ 7 月 11 日
@ ギャラリー松真館 (長野県長野市松代町)
「ちいさなアート展 2017New York」2017 年 10 月 26 ～ 10 月 29 日 /11 月 4 日～ 11 月 5 日
@Studio 34 Gallery(New York)



始まり　1000mm × 803mm　油彩／キャンバス

始まり

Tomoro KAWAI 1976~
川合朋郎

今は無いけれど私は幼い頃から周りに追い立てられるような感覚になることがあった。
自分で”発作”と呼んでいた心理的な現象は私が物心ついた頃から大学に上がる頃まで頻発した。
それは時と場所を選ばずに訪れた。
自分意外の時間の流れが速くなる感覚で置いてけぼりになったように感じる。
人々の会話は猛烈な早口になり渦を巻くように私の周りを回り出す。逆に私の動きは鈍くなりほとんど停止してしまう。ただドキドキと心拍数が上がったようになり胸は圧迫された。その症状には訪れる前兆があり、遠くから波が寄せてくるように心がザワザワするのだった。
幼い頃は恐怖でしかなかったが小学校に上がる頃にはうまく付き合えるようになっていた。「今きてるけどわかる？」などと家族に尋ねたりする余裕もあった。
そんな症状もとうに無くなってしまった。
未発達な脳が原因とどこかで読んだが二十歳頃に失った時は寂しかった。

川合朋郎 Tomoro Kawai
1976 年大阪出身
東京藝術大学大学院修了
http://tomorokawai.com

【グループ展】
珈琲 & ギャラリー ウィリアム モリス／渋谷
2017 年 6 月 6 日～28 日（日・月・第３土 [17] 休）
みぞえ画廊／福岡市
2017 年 7 月 15 日～30 日（会期中無休）
Bunkamura Box Gallery ／渋谷
2017 年 8 月 3 日～ 8 月 9 日
【個展】
FFS_Lounge Gallery ／長野市
2017 年 7 月 1 日（土）~7 月 29 日（土）
NICHE GALLERY ／銀座
2017 年 7 月 12 日～22 日（日曜休廊）

information

NAF2017 -ART show+art free market-
6/10,6/15.16.17,6/22.23.24
6/24:art free market+LIVE
& クロージングパーティー
@FFS_Warehaouse Gallery

ナガノオルタナティブ

ナガノオルタナティブ 2017
「プリベンション」徳永雅之展
7 月 1 日（土）~7 月 29 日（土）
入場￥500
@FFS_Warehaouse Gallery

T17(タブロー 2017：FFS 公募企画展)
2017 年 8 月
@FFS_Warehaouse Gallery

ナガノオルタナティブ 2017
「プリベンション」松本直樹展
9 月 2 日（土）~9 月 30 日（土）
@FFS_Warehaouse Gallery

http://flatfileslash.com
gallery@flatfileslash.com
FLATFILESLASH / Warehouse GALLERY

FLATFILESLASH Lounge Gallery

前沢泰史木彫 + 写真 6 月 10 日 ~6 月 24 日
川合朋郎ドローイング展 7 月 1 日 (土)~7 月 29 日 (土)
D17　8 月 4 日（土）~8 月 26 日（土）
9 月 結城愛展

TOPOS
http //toposnet-com

トポス高地 2017

6 月　鈴木幸野展
7 月　丸山玄太展
8 月　塩原理絵子展
9 月　徳永雅之展
アリコ・ルージュ / 飯綱東高原 / 火曜休み
http://homepage3.nifty.com/haricot/

トポスパブリック 2017

4~6 月　疋田義明展
7~9 月　徳永雅之展
10~12 月　たかはしびわ展
@ 医療法人北島眼科クリニック

information

萱
http://kayaartcompetition.com
mail : info@kayaartcompetition.com

萱アートコンペ 2017

この度、昨年 2016 年より開始し、本年で２度目となる、10 月に開催予定、応募期間 5/10~7/28 の、萱アートコンペ 2017 公募を、5/10 より開始いたしました。よろしくお願いします。
この公募企画は、人や「まち」を豊かにする文化の力としてコンテンポラリーアートの小作品にスポットを当て、プロ・アマチュア問わず作品を広く募集するものです。
地域で活動制作する作家（美術家）諸氏に審査をお願いして、大賞（10 万円）を始めとする各賞を授与し、受賞・入選・応募作品による企画展を開催いたします。
古（いにしえ）から人々が行き交い、文人墨客が訪ね逗留した歴史が刻印された、長野県千曲市大字戸倉に位置する坂井銘醸株式会社の歴史在る蕎麦処・酒蔵などの各施設空間の環境を繋げ活かし、アートを通じ、文化芸術の創造・交流の場へと活性を促し、さらに人と「まち」の潤うことを趣旨とします。
応募申込から作品搬入まで、期間のずれがございます。公式サイト・応募要項の、応募詳細をご参照いただき、応募申込書として送付していただくことで応募可能となります。
当該公募企画展公式ウェブサイト　http://kayaartcompetition.com の、応募フォームからも応募できますので、ご利用ください。

萱アートコンペ 2017 実行委員会 代表 梅田明雄（梅田版画工房）

萱アートコンペ実行委員会
〒389-0822 長野県千曲市大字上山田 671-2 梅田版画工房内
問い合わせ　Tel:026-276-1316

分枝 branching
http://branching.jp
branching 21
publish : 09,June.2017
分枝 ブランチング 発行 : クマサ計画　〒389-1226 長野県上水内郡飯綱町川上 2755-950 phone: 026-405-7519